

中国東北部被占領期における宗教を利用した 日本の侵略問題に関する論

程 舒 偉

1931年、日本帝国主義は全世界を震撼させた“九・一八事変”を発動し、1932年には“満州国”の傀儡政権を作り上げ、中国東北部は14年にもわたり日本の侵略者による植民地となった。

中国東北部が占領されるに際し人民は大きな困難に直面したのだが、教会や宗教団体は災難を避ける世外の楽園になれなかったばかりではなく、侵略戦争の侵略性を覆い隠し、侵略を推進する道具として逆に日本帝国主義に利用された。というのも、日本は中国人民を統治・抑圧するために、軍事的・経済的・政治的な手段を利用しただけでなく、あの手この手で宗教を利用し、対外拡張や植民地の人民を毒する活動を行い、中国の抗戦に深刻な危害をもたらしたのである。

だが、長期にわたり、中国東北部被占領期における宗教を利用した日本の侵略問題に関する研究は比較的手薄であった。このため、僭越ながら筆者はこの方面において初歩的な研究を試みる次第である。

一、九・一八事変前における日本の東北部に対する宗教浸透

九・一八事変前、中国の東北部といえば遼寧・吉林・黒龍江・熱河の四省を指し、総面積は130万平方キロメートル、人口は3000万人、漢民族・満州族・蒙古族・回族・朝鮮族など10余りの民族が生活していた。また、これら各民族は一般にそれぞれ各自の宗教や信仰を有しており、比較的辺鄙な地域にさえ宗教あるいは宗教的なものがあり、この地方にはあまねく宗教が存在していた。

1. 東北部にもとからあった宗教の基本的状況

東北部に存在していた宗教のうち、土着の宗教には仏教・ラマ教・道教・イスラム教があり、西洋からの外来の宗教にはキリスト教(プロテスタント)、天主教(カトリック)、ギリシア正教、ユダヤ教があった。また、日本の宗教には神道、日本仏教があった。この他にも、地方色が色濃いシャーマニズムや在理教(白蓮教の一派)など、宗教的な存在があった。

九・一八事変前、東北部では各種の宗教が並存すると同時に信仰的自由があり、宗教の分布も広汎な地域にわたっており、また特に宗教が盛んである地域も見られるという特徴があった。だが、当時東北部の民族は様々であり、広い地域内に相対的に分散して居住していたことから、大多数の東北人が信仰して支配的地位を占める宗教は存在しなかった。

総合的に東北部の宗教についていえば、民族が異なればそれぞれが信仰していた宗教も様々であり、諸宗教が入り乱れていたといえることができる。

民族	主な宗教あるいは宗教に準じたもの
漢族	仏教、道教、キリスト教、天主教、在理教
満州族	道教、仏教、シャーマニズム
蒙古族	ラマ教(紅教・黄教)、シャーマニズム
回族	イスラム教
オロチョン族、エヴェンキ族、 ^{カルトーフ} 柯尔特族、 ^{キリアーフ} 基里亚克族などの少数民族	シャーマニズム
ロシア僑民	ギリシア正教
日本僑民	神道、日本仏教

そのなかでも仏教は影響範囲が最も広く、信徒数も最大の宗教であった。仏教が東北部に入ってきた具体的時期ははっきりしないが¹、東北部に現存する北魏や唐、遼代などの遺跡から見れば、仏教及びその文化は非常に早い時期に東北に伝わっており、明清時代には既に広汎にわたり伝播し、しかも相当盛んであったと断言することができる。また、東北の仏教の殆どは「実修仏教」に属する禅宗であり、臨濟宗、曹洞宗、毘盧宗、^{コクイサツ}賈菩薩宗、雲栖宗²などがあり、在家修行の人々による居士林もあった。

中国発祥の宗教である道教は既に早くから民衆の日常生活に溶け込み、東北部に伝わった後は漢民族や満州族の間で広く信仰されてきた。道教の宗派は大きく「正一派」と「全真派」の二つに分類できるが、東北部の道教の大部分は全真道であり、その中心となる教義は「清虚自守」「卑弱自禁」である。また、東北部の道教は非常に民間の風俗迷信と溶け合い、信仰形式もまた民衆の日常生活に接近したものであった。

ラマ教は密教に属し、その起源はチベットにある。東北に伝わったのは黄教派が多く、蒙古族が主な対象であった。また、東北部では蒙古族とラマ教は不可分の密接な関係にあり、ラマ教は完全に蒙古人の生活の中に溶け込み、蒙古人の生命の一部分でさえあった。

イスラム教はほぼ明朝末期に東北に伝わり、信徒の多くは回族である。彼らは自分たちのモスクや経典、回族学校を有しており、その戒律は非常に厳しいものであった。

東北部におけるキリスト教にはプロテスタント、カトリック、ギリシア正教が含まれる。この中でもカトリックが最も早く東北部に伝わり、奉天や吉林には10の教区があり、その活動もなかなか活発であった。プロテスタントの宗派は数多く、奉天や撫順に本部を設置し、全東北部の宣教及び医院や学校など社会教育慈善事業に従事していた。また、ギリシア正教が東北部に伝播したのはロシア人が東北へ移入するようになってからのことであり、19世紀後半には白系ロシア人が東北に移住して続々と教会を建設し、信徒の多くは白系ロシア人であった。

神道は日露戦争前後に東北部に伝えられ、主に日本人居留民の間で信仰されていた。

このように、この時期の東北の宗教は多元的であり、信仰も相対的に自由であった。そして、土着の宗教は長い歴史の中において長期にわたり中国の伝統文化や思想、習俗と互いに影響しあって融合し、社会生活に深く浸透していた。一方で、外来宗教とりわけキリスト教の類は各種の宣教組織や宣教師を派遣し宣教に力を尽くしてきたものではあるが、しかし事実上本当に住民の心を捉えて広く伝わったものは少なく、土着の宗教と拮抗しようもなかった。日本の宗教は、時局の変化に従い日本政府の要求に応じて絶えず調整されていき、最終的には軍国主義の戦車に足を踏み入れ荷担したのである。

2. 日本の東北に対する宣教の初期段階

中国と一衣帯水の地にある日本は明治維新以後軍国主義の道を歩み、対外拡張の迷夢の中におぼれていた。1894年から1895年にかけて、日本は朝鮮と中国を侵略する日清戦争を起し、腐敗した清朝政府は半年のうちに敗れて講和を迫られることとなり、日本との間で中国の主権を損う内容の「下関条約」を結んだ。また、この条約の交渉において、李鴻章は黙認という形で日本に布教権を認めている。

この後、日本の勢力は中国の東北部で急速に膨張し、東北部を狙って久しい帝政ロシアと鋭く対立するようになった。1904年から1905年にかけて、双方は東北部において覇権争いの戦争を起し、その結果帝政ロシアが敗北して日本と“日露平和条約”すなわち「ポーツマス条約」を結び、日本の朝鮮における特殊地位を承認し、中国の遼東半島租借権と南満州鉄道の各種特権を日本に譲渡した。こうして中国東北部侵略の日本の優勢的地位が確立されたのである。

帝国主義と化した日本は軍事上順次に対中国侵略の過程を拡大させていくなか、宗教的な浸透も強化していった。この時期、日本が主に利用した宗教は仏教である。日本の仏教は古代中国から伝えられたものであり、これは本来なら日中文化友好交流の成果の一つであるのだが、近代以降、日本は自分の手で加工した日本仏教を中国に引き戻したのである。

“征韓論”を唱えていた江藤新平は中国へ仏教徒を派遣するという建議を出しており、その中国侵略の意図は明瞭である。1871年3月5日、江藤は大納言岩倉具視に対外政策の意見を出し、中国の当時の状況に対して上下二つの日本の政策を示した。この上策10条のうち6条は中国へ仏教徒を派遣することに関するものであった。以下、その6条を書き記す（意訳）。

1. 中国人のうち2%の者は儒教やキリスト教を信奉しているが、その他の者たちは我が国の人民と同じように仏教を信奉している。従って、今後仏法や修行に関する事柄を伝播するよう僧侶を派遣し、以って民心を安定させ、間諜を送り込むための戦略の種とする。
2. 仏教各派に中国へ僧侶を派遣することを奨励する。
3. 浄土真宗の信徒及びその他の僧侶の中から選抜し、彼らを間諜として中国へ派遣する。
4. 中国の地理及びその他の状況を調査する密偵として必ず数名を選抜する。

これらの者は上述した僧侶の中にも含めてもよいし、あるいは状況によっては別に派遣することとしてもよい。

5. 間諜を派遣し成果を得るといふ上述した工作は5年以内に完成されねばならない。
6. 一旦「陸軍が軍備を揃え、間諜が成果を上げて中国の地理情況に詳しくなり次第、戦略を決定する」こととし、中国側が“無礼事件”を起こすの³に乗じて単独あるいはロシアと協力して「一挙に中国を征服」する。

これらのことから、明治政府の設立当初から日本は仏教を中国侵略の手段として利用すると考えていたことがわかる。こうして侵略戦争は宣教のために便宜を図るものとなり、逆に宣教活動もまた侵略戦争の太鼓持ちや“別働隊”となり、日本政府は日本の仏教各宗派が中国に拠点を築き、布教活動を展開することを支持したのである。そして、こうした動きのなかで中心となったのが、真宗大谷派と浄土真宗本願寺派であった。

中国で初めて大谷派の教えを説き始めた人物は小栗栖香頂である。1873年7月、彼は布教活動のために単身で上海へ来た。後に天津を経て北京に赴き、北京の竜泉寺清慈庵に仮寓した。そして、1874年元旦に彼自身が釈迦牟尼仏へ捧げた祈願文に「香頂昨年の9月に北京に至り、日夜ただ汲々として言葉を習うばかりであり、仏教同盟の事について力を尽くす暇がない。」「使香頂粗通言語、而志願満足之秋也（香頂は多少言葉に通じるようになり、満足しているのである）」と⁴あるように、中国人僧侶到北京語を学んだ。

この時、小栗栖香頂が中国へ来た最も重要な目的は中国において仏教を志す人を呼び起こし、日本が指導する仏教教団連盟を設立することであった。このため、彼は帰国後に護法13条をまとめ、それらの原則を中国の仏教界に宣揚したが、誰一人呼応する者はなかった。こうして、日清戦争前の宣教は失敗し何の成果もなく引き返していったのである。大谷派のこの時の中国での動きと以後の積極的活動とは全く異なるものであった。

しかし、小栗栖の中国視察報告は後に日本が中国で宣教するための下準備となった。中国での初めての布教は失敗したが、これは日本が宣教師を中国に派遣して宣教しようとする決心を変えさせるものではなかった。事実、大谷派は日本の国策をその布教方針へと転換し、国策執行補助者の役を担ったのである。

1894年8月1日、天皇は清国との宣戦の詔書を公布し、8月6日に大谷派の法主は全国の信徒に対し「苟しくも帝国の臣民たるもの、この国家の危機にあたりその身を国に捧げるのは当然であり、とりわけ我が一門の信徒は既に教え示した真・俗二つのあり方に依る（二諦相依）という宗義を遵守し、天皇制国家のため、国民のためという祖訓（宗祖親鸞以来の仏法の道理）を心に銘記し、ひたすら国恩に報いる事に専心しなければならない⁵」との垂示を出した。

こうして大谷派は積極的に国策に呼応し、出征兵士に対して布教を行っていかうとする流れの中で大きな成果を挙げ、その他の宗派の見習うべき手本ともなったのである。

日清戦争における勝利の余勢を駆って、大谷派の布教は中国で迅速に進展した。1898年、真宗大谷派当局は法主の一族である大谷勝信と大谷瑩誠の兄弟を“開教主任”として中国に派遣し、東南地区の蘇州、杭州、泉州、厦門などの地で積極的に布教活動を展開した。

1904年5月に日本軍が安東（丹東）を占領し、これ以後大谷派などの布教が東北部にて始められる事になる。日本軍が安東を占領すると、大原武慶少佐は即刻朝鮮の京城にいる大谷派の僧侶に布教所を建設するように委託し、これを受けて和田什意がすぐに安東に安東沙河鎮寺を建てた。これは日本の仏教組織が東北に立てた最初の布教所であった。

1912年には遼東半島の大連に“大連別院”が建立された。こうして、1931年の九・一八事変までに大谷派の東北における布教所は合計17ヶ所となり、それぞれ安東、大連、本溪湖、奉天、吉林、撫順、旅順、沙河口、鞍山、長春、鶏冠山、ハルビン、龍井、延吉、遼陽、四平街、鉄嶺の地に分布していた。1926年、大谷派の海外における布教の地理的分類の中において、中国の東北部と台湾、朝鮮が一群、つまり植民地布教区と区分されたが⁶、これは日本が東北を併呑しようとしていた切なる野心を十分に反映したものとみられる。

中国への布教において、浄土真宗本願寺派も全くしりごみすることなく、1899年から大谷光瑞が中国各地に赴いて実地に視察調査や巡回布教を行った。本願寺派の場合は当初から重点を中国東北部においていた。1901年7月、まずハルビンに出張所（出先機関、つまり布教所）を建てた。1931年の前半には、本願寺派が東北に設置した布教機関には、長春の“満州開教教務所”“満州開教区”、公主嶺の“訓練所”、大連、旅順、營口、本鶏、瀋陽、吉林、四平街などの別院、

出張所が21箇所ほどあった。

しかも当初から本願寺派もまた政治的目的を有しているという傾向を明らかに顕しており、大量の“従軍僧”を日本軍に派遣していた。近代以降、日本が最も早く軍隊の中に従軍僧を設置したのは1904年から1905年の日露戦争の期間であり、この方面において本願寺派は“著しい戦功があった”。

日露戦争期、明治天皇は浄土真宗本願寺派の法主である大谷光瑞に対して褒賞を授与し、「紹述先志」「奨励門末一般之奉公、(先人の志を継承して述べ伝え、公に奉じるよう門人を奨励し)」「また広く従軍僧を出征部隊に派遣し士気を鼓舞す。その労少なく非ず。朕は深くこれを喜ぶ⁷」と賞賛している。これは本願寺派が宗教と政府の行為を緊密に関係づけ、日本軍の慰問や日本居留民の教化、中国民衆の宣撫活動に従事する事を一層激励するものとなった。

日本政府の感化や仏教真宗教団が範を垂れるなか、中国で布教を始める様々な宗派が激増した。日本の曹洞宗は1908年に中国東北部で布教を始めたが、まず始めに安東と旅順に“布教師”を派遣し、九・一八事変までに合計21の布教所や寺院を建てた。浄土宗は1905年に東北へ赴き旅順や大連から寺院を設立し始め、九・一八事変までには17ヶ所の布教所を建てた。

こうした日本の仏教宗派は中国各地に寺院を建て、所謂布教活動を展開したが、事実上彼らの布教は日本人に対するものだけではなく、様々な手段を用いて東北の住民に対する布教活動も展開した。彼らは日本の宗教が民衆を教化する内容や、日本の侵略者の思想的価値観が中国に浸透するよう力を尽くしたのであり、宗教本来の教義からますます離れていった。もちろん、布教以外の目的を持ち、日本の侵略者が侵略戦争を推進するのに直接歩調をあわせた日本人僧侶がいたことも想像に難くない。

このように、対外布教事業に対する日本政府の支持は当初密かなものであったが、次第に政府の対華侵略政策の中に組み入れられていき、日本の中国における布教は極めて政治的色彩の濃いものとなったのである。

二、被占領時期の東北部に対する日本の宗教操作とその利用

日本帝国主義の中国東北部に対する侵略は早くから企てられており、日清戦争、日露戦争及びその後の第三次日露密約を通して日本の東北における軍事

的・経済的な優勢は次第に確立されていった。そして1920年代、日本帝国主義は中国東北部を独占するために世論や軍事、移民の方面において大々的な準備を行ったのである。

1927年の東方会議において満州は“日本の生命線”とされ、“武力による満蒙問題の解決”が言われた。そして1931年に“九・一八事変”を画策し、中国を武装進攻する戦略的序幕が切って落とされたのである。

東北部侵略の過程において、日本侵略者は単純に武力を用いて一つの民族を征服するのは賢明ではなく、必ずや“文治”を兼ねる必要があり、その中でも重要なのは各種の宗教組織を利用して反満抗日の人々の精神を麻痺させ軍事的進攻を補い覆い隠すことであると深く感じていた。こうして東北部が占領されていた14年間、日本は宗教方面において徹底したやり方を採用したのであるが、これは東北部に対する日本の「武」で攻撃し、「文」で治めるという侵略の野心を暴露するものでもあった。

宗教が人々の精神生活を支配し、植民統治を確固たるものにするのに替えがたい役割を果たすことに鑑み、日本植民統治当局は宗教を重要な事項として重要視していた。このため、関東庁は各時期において宗教事務を主管する部門を設けており、「満州国」の民生部が掌握していた宗教事務は日本人の佐藤某が一手に握り操縦していた。「満州国」政府は礼教科（礼儀と道徳を教える機関）と警務庁特高科を組織し、東北部全土にわたる宗教団体に対して何度も全面的に系統的な調査を実施したり、あるいは部分的に抽出調査を行ったりした。

1939年、第一次調査が終了し、1940年から再び三年計画で継続して宗教の宗派別調査が継続して行われた。⁸1937年の「満州国」民生部社会司編集印刷の『宗教調査報告』と、1944年の「満州」情報所編集印刷の『満州の宗教』によれば、調査範囲は東北部全土にわたっており、辺鄙なところまで津々浦々もれることなく、調査内容は東北のあらゆる宗派団体の名称、規模、性質、習慣、布教場所、信徒人数、政治顧問が含まれており、あわせて具体的な対処方法がかかれ、非常に苦心を重ねて作成したものであるといえる。

これらの宗教団体に対して「満州国」政府当局は東北部全体に対するのと同じように制限しつつ利用するという政策をとった。九・一八事変以後、東北人民の既成団体はその存在を許されなかったが、しかし当局は利用できると思われる宗教団体には“寛容な”態度をとって存続させた。というのも、これらの数

寺院・教会及び布教人員数（1942年4月現在）

種類別	寺院・教会	布教人数	信徒
仏教	2134	5733	5511888
道教	2329	4400	1074333
イスラム教	243	481	203683
キリスト教	1152	3990	395277
神道	169	600	71601
その他	65	134	74259
備考	寺院許可証を有する	布教身分証明書を有する	1941年末まで

多くの信徒を有し、しかも一定の社会的影響力もある宗教団体を、自らの望む方向へ向かわせて傘下に組み入れることにより、中国人民をコントロールして麻痺させ、東北人民の民族意識と抗日闘志を消し去ろうと企んだからである。つまり、諸宗教や宗派及び団体に対して、日本帝国主義は全部が全部同じ手投を用いたのではなく、制限を加えて操縦したのであった。

1. 土着宗教の利用

西暦1世紀より仏教やイスラム教は相次いで中国に伝わり、歴史の変遷にもなって中国に根をおろし、各民族の社会生活や風俗習慣、心理状態の中に深く入り込んでいった。そして、民族の歴史や文化及び思想や感情と密接に関わり、中国で生れた道教と共に中国独特の土着宗教を形成して中国伝統文化の一部分となっていた。

日本の植民当局は東北の土地に足を踏み入れるや、宗教が人々の精神生活を支配する重要な役割を果すことを十分に重視し、これらの宗教を利用して思想上における成果を上げようとした。そして、仏教、イスラム教、ラマ教、道教などの土着の宗教に対し、制限を加えつつ発展させ、操縦しながら利用したのである。

これらの宗教のなかでも、「満州国」政府当局が特に制限を加え利用したのは仏教であった。当時、仏教は「満州国」の中において最も影響力の大きな宗教であり、550万人余りの信徒と5733人の布教者を有していた⁹。この「満州国」に

において最大の影響力を有する宗教を有力な精神統治の道具にするために、日本帝国主義がとった主な方法は以下のとおりである。

1933年より日本仏教は天台宗今井昭慶和尚をハルピンの極楽寺に、同じく都築玄妙を長春の般若寺に派遣し、また後者の般若寺を“護国般若寺”と改名して東北仏教界に侵略の魔手を伸ばした。1934年以降、日本の僧侶たちは次々と東北各地の主要な寺院に駐在し、長春の般若寺には寺川行舟と田代寛第、ハルピンの極楽寺には佐藤富江、営口の楞嚴寺には木村などがいた。この他呼蘭、一面坡、綏芬河の各地の中国寺院にもみな日本人僧侶が“布教活動”を行っており、東北の主な寺院をコントロールしていた。

これらの日本人和尚はみな一定の政治的任務を負っており、昼間は木魚を叩いて念仏を唱えては仏教や仏教の周囲に“反満抗日”的な思想活動があるかどうかを監視し、夜は報告書作成に忙しい間諜活動を行っていた。とりわけ、極楽寺の今井昭慶は日本のスパイであり、頻繁に長春～ハルピン間を往来しており、長春・ハルピン¹⁰両市における中国人僧侶の監視任務を行うという責任を負っていた。

日本人僧侶が東北にきた主な任務は「仏教に依拠する統治を創造し、日満親善の理想的な仏教総会を実現し、東北の仏教活動を監督・指導する¹¹」ことであった。このため、九・一八事変後多くの正義感を有する中国東北の宗教的リーダーや組織は日本の仲間になることを恥とし、続々と内地平原部へ移住していった。一方、日本は上述した任務を果すために、宗教界の一部の上層分子や失意の政客をまるめ込んだり買収したりして、被占領地区において各種の宗教組織を成立させた。

1939年には日本、朝鮮、「満州」の仏教徒による“満州国仏教総会”が成立し、当時ハルピンの極楽寺を主事していた悪名高い如光が会長となった。彼は早くから日本仏教の天台宗の手先となり、日本のスパイと結託し、また満州国の総理大臣であった張景恵及びその他の大漢奸と密接な関係を有し、すこぶる当局から信任されて重用されていた人物である。彼は甘んじて「満州国」当局のために奉仕し、東北部の被占領期間に恥ずべき役割を演じていた。

“仏教総会”や“中日仏教一体化”が叫ばれるなか、「満州国」総理大臣の張景恵、侍従武官張海鵬、民生部大臣呂榮寰、及び禁煙総局局長袁慶濂らは仏教発展の勢いを見て次々と仏教に帰依してその門弟となった。また権勢のある人

に取り入って跳梁し、個人の栄華を求めようとした小物の漢奸が何もかも彼らに同調してこれに倣った。彼らは日本帝国主義下の仏教に対する一切の活動に歩調を合わせ、あらゆる角度から余すところなくこれを支持し、「満州国」の仏教は不均衡に発展することになったのである。

植民当局は中国人の結社を警戒し、仏教団体にもコントロールを加えたが、なかでも“満州国仏教総会”は極めて下劣な役割を果たした。「これらの御用団体の様々な罪悪は、東北社会の暗黒さをますます深刻なものとしたのである¹²」。

日本帝国主義が精神上において中国人民の民族意識を破壊しようとするのに、仏教の教義は確実に利用できる重要な道具であった。そして、仏教総会の日本僧や中国僧たちは惜しむことなくその仏教教義を放棄し、教義にある“悲観厭世”“逆来順受”（劣悪な境遇や理不尽な待遇を耐え忍ぶ）の観点に偏ってこれを強張し、その統治を強化しようとした。

日本人の指示の下、如光はしばしばハルビン、瀋陽、營口などの地を訪れ、寺院や居士林で講演を行った。そして、説法を通して群衆に向かい“因果論”を頭に植え付け、「現世の果報は過去に原因があるため、人生の第一義は耐え忍ぶことである」のであり、「信仰のある者は菩薩親冤平等的做法（菩薩道による「親」も「冤」も平等であるという考え方）を学び、自分の父母を殺めた仇をも自分の父母としてみななければならない¹³」などと説いた。愚かにも中国人民の精神を麻痺させ、父母や同胞を惨殺した日本侵略者に我慢し、反抗しないよう企んだのである。

如光は仏教の影響を拡大するため、広く弟子を集めて各地へと布教に派遣した。彼らは“衆生平等”を“親冤平等”とし、“血海深仇”（近親を殺された深い恨み）を“日満親善”といい、こうした敵を友とする反動思想をもって中国の仏教徒を騙したことは、彼らが日本帝国主義に忠実な奴隷であったことを表すものである。

日本は仏教総会などの組織を利用し、中国の抗戦を破壊する多くの罪を犯した。九・一八事変後、亡国の奴隷となることに甘んじなかった東北の愛国軍民は、長白山を根拠地として日本の侵略者と粘り強く戦った。日本は抗日連合軍と人民群衆との連絡を切断するために現地の居留民を移住させ、長白山や撫松の地を無人区や“真空地帯”にしようとした。

1938年、日本の差し金により「満州国」協和会は仏教護法会、大同仏教会、

普化仏教会、道德總會、紅卍字会などの責任者を招集して会議を開き、日本に忠誠を尽くし、力強く体が頑丈であり“機敏で神経が鋭い”仏教徒60人余りを選抜して“宣撫班”が組織された。そして彼らは日本側の専門の訓練を受けた後に長白山一帯に派遣され、“宣撫”及び“情報”工作を行った。

彼らは甘い言葉で帰屯并戸地区(合併地区)の群集に引越しを勧め、もしそれに服従しない時には日本の関東軍に報告して鎮圧を加えた。そして、日本帝国主義が強制的に帰屯并戸における罪深い政策(合併の罪深い政策)を推進していった時、仏教組織は中国人民を殺害する別働隊という恥ずべき役を演じたのであった。

太平洋戦争勃発後、「満州国」政府当局は監獄の中の“犯人”に対して“教誨”や“感化”活動をするために、新京監獄の“教誨師”を務めていた般若寺の方丈善果など仏教関係者を利用した。この“教誨”の対象は“一般教誨”と“特別教誨”に分けられており、“特別教誨”の多くは極刑に処せられる人に対するものであり、“犯人”が刑場に引かれる前に教誨師が“南無阿弥陀仏”を唱えてその最期を見送った。

極楽寺の普蔭和尚が作成した略統計によれば、1939年から1945年の6年のうちに、僅かハルピンの一つの監獄だけで“特別教誨”を経て殺害された愛国同胞は70名余りもあった¹⁵。これらの所謂教誨師は、事実上中国人民を殺害する日本帝国主義の共犯者であった。

日本帝国主義の暴威の下、仏教は精神的にも物質的にも、その機能を“発揮”した。「満州国」期、とりわけ太平洋戦争勃発後、仏教は全く例外なく戦時体制に組み込まれ、仏教徒たちは貯蓄や金属献納及び国民教化挺身、増産報国運動を展開するように組織され、僧侶もまた夏の早魃の時には雨乞いの読経のために組織されたのである。

この他にも、1944年伯那納の仏教徒43人が婦農して開墾地に赴き、袈裟を着て春の耕作に従事したように、僧侶も時には直接増産活動に参加する事もあった¹⁶。また、“金属献納運動”においては各仏教の寺院や古刹がかなり犠牲となり、北安省徳都県五大連池古刹の大小約250、総重量数十トンの銅製の仏像も“献納”されたように、香炉や鐘、仏像などはみな金属として“献納に出す”こととなった¹⁷。

「満州国」政府は仏教に対するのと同様に、イスラム教に対してもまた同様

に利用し制限を加えた。

東北部占領後、日本帝国主義はまもなくイスラム教徒の身なりをさせた日本のスパイを派遣し、イスラム教徒を挑発して分立させる活動を行った。例えば、寧夏などの地に何年も潜伏していた川村乙麻は川村狂堂と改名し、イスラム教徒の身分で“新京”にやってきて長期間長通路のモスクに住み、新京や瀋陽などの地の阿訇（アホン、イスラム僧の位）やその他の教徒を監視した。

1934年2月、川村狂堂らの陰謀の下、“新京イスラム教協会”が成立した。そして、これを基礎として7月に東北部全体の“満州イスラム教協会”が成立し、“満州国回教協会”と改名して川村自らが総裁となった。この“回協”は各省都に10の支部、182の分会が設置されており。また、これを設立した趣旨の中では真っ先に“大東亜精神を宣揚”し、“民族協和を実現”することが主張されている。したがって、日本がイスラム教の統治を利用しようとした下心は明らかである。

日本帝国主義の指導の下、“回協”は何度も代表団を組織し、回教圏展覧会に参加するために日本に赴き親日活動を進めた。一方、侵略戦争が不断に拡大されていくなか、日本人は侵略の視線を西北地方に向けた。中国の西北五省は抗戦の後方基地であり、イスラム教を信奉する信徒は4000万に達しており、日本帝国主義はイスラム教を手段として西北地方に侵略しようとしたのである。

こうして、日本に掌握されていた“回協”は不断に西北へ人を派遣し、国家の分裂活動を行った。瀋陽の回教中学校校長であった張子文と奉天市小西区长兼回教協会支部長の楊進文は共に命を受けて西北へ行き、回族軍閥の中に潜り込み蜂起あるいは帰順を扇動した。

日本帝国主義は自らが標榜していた民族団結や民族平等の政策を実行することはなく、反対に偽の“民族協和”の名の下に民族間の離間を促す策をとり、民族を分断させて治めることによって、民族を統治し奴隸的に酷使しようとした。

蒙古族の人民に対するやり方がその典型である。日本は蒙古を狙って久しかったが、九・一八事変以前、日本は蒙古全体を侵略する力はなかった。このため蒙古を東蒙古と西蒙古の二つの部分に分け、漸次侵食しつつあった。だが、事変後、日本は東蒙古を侵略して占領し、“興安省”と改称して「満州国」の内

に目をつけた。蒙古において、ラマ教の社会的政治的生活に対する影響は極めて大きく、殆どの人がこれを信じていたからである。

1935年7月25日、日本関東軍は中国を分裂させるという目的を達成させるため『対蒙古対策要領（極秘）』を制定した。その中心的な考えは「王侯と人民を丸め込むよう努力し、とりわけ勢力のあるラマ教を通して日満両国の政策の真意を貫徹し、各種工作を進める¹⁸」ことであった。このため、日本帝国主義はあらゆる手段を用いて蒙古族人民を騙して懐柔し、ラマ教に接近した。

まず、勝手にチンギスハンを宣伝して広くその肖像を印刷して発行し、“満蒙非中国論”を投げ与え、歴史を歪曲するなどして蒙古族の上層人物を買収した。また、ラマ教や蒙古族の仏教団体を不断に日本訪問へ誘い、日本に留学する蒙古族の学生を特別に“面倒をみる”などして、日本仏教のラマ教に対する影響を拡大した。さらに“ラマ訓練所”を成立させて蒙古の寺院に“日本ラマ”を派遣し、各種の“顧問”とした。

黒龍江省政府が遼寧省政府に対して打った電報に「かの日本人の満蒙に対する計画は誰もが知っていることであるが、今また例に倣って蒙古の民の信仰や宗教を利用しようとしており……………、その下心が計り知れないことは概ね想像できる¹⁹」と言っているように、日本人がラマ教を利用し、蒙古全体を狙おうとした下心は容易に察せられる。

「満州国」政府は中国で生まれ育った道教を利用し制限する機会も見過ごさず、寺院を調査して財産を清算し、教徒を監視した。1939年10月21日にはまた“満州国道教総会”を創り出し、恥知らずにも中国道教の徒に日本の“王道”を学ぶよう要求し、植民思想を宣伝した。

2. 西方宗教を異化させる

16世紀にヨーロッパから宣教師がやって来て以来、何百年の間にキリスト教は中国の多くの都市や農村に深く入り込み、宗教界における一つの格別な力となった。日本の侵略期間に至るまでは、東北部被占領区におけるキリスト教などの西方宗教は多く英米にコントロールされ、且つその影響は大きく、日本は大きな不安を抱いており、このため一心に西方宗教のイニシアティブを握ろうとしていた。

九・一八事変の時、日本の東京キリスト教長老会の会長を務めていた日匹信

亮は「日本人は必ずや欧米化された勢力を駆逐し、日本化した日本のキリスト教をこれに替えなければならない²⁰」と大声で唱えていた。そして、「西洋宗教の東洋化」をスローガンに、日本人は日本式のキリスト教組織を創り始めたのである。

日本の植民者はまず西方帝国主義による東北部の教会を強奪しようとした。そして日本は瀋陽を占領した後、東北軍の糧食工場にある大量のビスケットを利用して事変の戦災にあった人心を買収し、“中日キリスト教救国会”を成立させた。

1933年9月には日匹信亮らの準備の下、“満州キリスト教会”が奉天に成立した。その後しばらくして東北部全土のキリスト教会の各宗派が一堂に会し、“満州キリスト教連合会”の成立が宣言された。こうして速やかにかつ遍く東北部全土に日本式キリスト教会の骨組みが組み立てられたのである。

実際にキリスト教会をコントロールするため「満州国」政府当局は英米など西方宗教の勢力をますます排斥し制限を加えた。瀋陽占領後には、日本の奉天憲兵司令はキリスト教の責任者やヨーロッパの宣教師を招集して訓話し、憲兵隊長は佩刀を抜き取って「これは大日本帝国皇軍の軍刀であり、敵を殺すばかりでなく一切の妖魔を鎮圧することができるものだ。よく聞け、反満抗日である者はみな容赦することなく殺してやるからな²¹」と脅しつけた。

これはただ口頭だけの“脅し”ではなかった。1935年秋には反満抗日の罪名において、日本は親ヨーロッパのキリスト教上層人士をほしいままに逮捕し、ヨーロッパ教会が「満州」の建国精神に服従しない場合は強制的にこれを閉鎖させたのである。このため、東北部の多くのイギリスやフランスの宣教師は相次いで帰国し、一部のヨーロッパ教会は日本と結託して自らの存続を図るなど、宣教活動は低調に陥った。

全面抗戦開始後、日本は中国キリスト教会をコントロールしようとして英米などの同盟国から抵抗され、報復心の強烈な日本帝国主義は一連の教会を閉鎖し、宣教師を殺害するという事件を起こした。さらにこの機に乗じて“キリスト教会を統合²²”し教会権力を強奪した。太平洋戦争勃発後、中国東北部のキリスト教会は完全に英米などの国との関係を絶たれ、「満州国」政府当局のキリスト教会となった²³。

ところで、外国の在華宗教勢力のうちでも親日派に対しては、もちろん日本

は喜んでこれを利用した。というのも、ギリシア正教の宣教師と「満州国」政府当局は密接な関係を有していたが、それはロシアの十月革命後、ロシア帝国のツァーリズムが崩壊して、次のソビエト政府は政教分離政策を実行しギリシア正教の一切の特権を取り消したので、ロシア帝国からの様々な亡命者たちは次々と中国へ逃れ、中国におけるギリシア正教の宣教師団や教会の人々は一様にソビエト新政府を呪っていたためであった。

こうして、反共反ソの方面において共通点を有することから、東北部における帝政ロシアのギリシア正教は、日本帝国主義に接近して侵略軍のために情報を探ったり、政治的取引を画策するために日本軍に追従したりするなどして、“日本侵略者が反ソ、反共、反華を進めていくための道具とな²⁴った”のである。

神学教育を整頓し、親日派の人材を育成することは“満州キリスト教連合会”の重要な職責であった。日本はキリスト教を自分のために動かすなら必ずやその思想拠点を占領しなければならないことを深く認識していた。そこで、まずその魔手をヨーロッパ教会の神学院に向け、学院に日本国籍の教師を招聘し、また「満州国」政府が編集・印刷した教科書を採用し、日本語の授業を開設するよう要求した。こうして多くの日本国籍の牧師が“大変身”を遂げ、神学院のイニシアティブを掌握したのである。また、日本人の監視の下、学生たちはその宗教観を強制的に注ぎ込まれただけでなく、「満州国」政府による亡国奴教育も受けさせられた。

「満州国」政府当局はこうして異化されたキリスト教会を、“大東亜聖戦”のために絶え間なく利用した。雑誌『教化通訊』を創刊したり、“教化報国講演班”を組織したり、あちらこちらで反動侵略政策を押し売りしたりして“大東亜共栄圏”あるいは“唯神の道”や“王道楽土”などの、ファシズムの使い古された中身の無い言葉を宣揚したのである。

監獄で布教することもまた「満州国」政府が奴隷化教育を行うのによく用いた手段である。彼らは各地の教会から牧師を派遣して“感化団”を組織し、毎週定期的に監獄で政治犯たちに教えを聞かせ、いわゆる感化教化活動を行った。また、日本の指示の下に、各地の教団は日本の侵略者の誕生日や命日に盛大な記念活動を行い、さらにまた“増産報国”や“貯蓄報国”、“金属献納”運動に参加するよう強制し、戦時の危機を増幅させ“大東亜戦争”を支援した。

このように西方の宗教を排斥し、制限及び利用すると同時に、日本キリスト

教会の各派は中国東北地区における宣教を独占しようと企んだ。そして僅か大連だけでも、1945年までに日本の教会が12ヶ所、牧師らが14人、信徒が2298人となったのである²⁵。

1937年以降、「満州国」内における日本キリスト教23派は日本キリスト教団を設立した。このキリスト教団は、中国に布教する教義の中に日本軍国主義の烙印が押されたものであり、公然と“日満一徳一心”“五族協和”などの思想論調を押し売りし、東北人民ともとの宗教との間の信仰関係を弱め、ひいては断絶させ、彼らの“皇国民化”を実現しようとする方針を図ったのである。

3. 日本の宗教を移植する

「満州国」の理念というのは、所謂日本と一体化する「王道楽土」と「五族協和」であった。これは日本人を主導者とし、宗教においても必然的に日本の宗教を中心とすることが要求された。つまり、根本的に東北人民の民族意識を打ち壊すために、日本はその国教である神道を「満州国」に持ち込んできたのである。

神道は日本において長い歴史を有しており、“最古の天上の神”である天照大神を信奉するものである。明治政府期において、それは天皇や政治と緊密に結合し、“国教”という独尊地位を獲得した。そして「国家が一つの宗教をその管轄下に置き、これを奉じて民族統一と優越性の特殊な象徴とした²⁶」のであった。

その後、対外拡張の需要に適応させるため、日本政府は意識的に宗教の社会的効能を強化し、規範化した。そして、古来から積み重ねられて日本民族の心理の中に深く潜んでいる神国の観念と、天皇崇拜思想を混ぜ合わせ、侵略戦争に尽くすための軌道に乗せたのである。

九・一八事変後、日本政府は再び国家神道を国教とすることを確認し、公然とその教義は軍国思想に適応しなければならないと打ち出した。「侵略戦争は聖戦であり、所謂八紘一字という思想は国体教義の根本となった²⁷」のである。

早く日露戦争期において、多くの神道の聖職者は軍隊と共に中国に渡ってきた。1905年11月、日本は東北部における最初の神社である安東神社を建立した。1909年、大連神社が正式に落成し、その後奉天、遼陽、長春などの他にも続々と神社が建てられ、天照大神の神霊が安置された。

九・一八事変前、東北には各種の神社が44ヶ所も建てられていた。そして事

変後、“神道”は日本軍国主義の戦車と行動を共にするようにして、加速的に戦時体制に組み込まれていき、侵略拡張政策を推進していく宗教的動力となったのである。

神道を国教としたこと自体は日本人の自由であるが、しかし日本の神である天照大神を無理に中国の東北部へ持ち込み、“満州国の建国の神”や“満州国皇帝の祖先”として奉ったのは、日本植民統治者が意図した陰謀的やり口である。その、神道を中国に移植する順序というのも、まず傀儡皇帝が外国に請来し、次に上から下へと強制的に信奉させ、最後に全ての宗教の上に君臨させるというものであった。

「満州国」政府が一手に手はずを整えていくなか、1940年6月22日に溥儀は8日間にわたる二度目の訪日を行った。この年は、まさに日本の紀元2600年にあたっており、日本の侵略者は機会をつかんで、溥儀に日本の“天照大神”と三種の“神器”を持ち帰らせ、“建国の神を祭る社”に安置させ、“建国神”としたのである。

この理由というのも「日滿の精神が一体なら信仰もまた同じでなくてはならない²⁸」というものであった。溥儀は改宗し祖先を換えることに対し極めて難色を示していたが、言われるままにするほかはなく「恩を戴いた感激の念をもって天照大神を奉る²⁹」と示したのである。

帰国後、関東軍司令の梅津美治朗が自ら付き添うなか、溥儀は所謂“建国の神”のために盛大な“鎮座祭”を挙行しただけではなく、さらに既に早くから日本人が起草していた『国本奠定詔書』を公布した。この詔書は恥もなく「満州国」の成立と発展を揚言し、完全に日本の天照大神や天皇陛下の“御加護”に依頼し、建国の神を祭る社を謹んで建立してこそ「初めて国家の基礎を惟神の道に確立することができる³⁰」と明確に規定している。このようにして“天照大神”が東北部に侵入し、“惟神の道”は東北人民の民族意識を打ち砕く荒唐無稽な説教となった。

注目に値するのは、日本侵略者は純粋な宗教や信仰を横暴な“奴隷化の手段”となし、「満州国」は天照大神を迎えて以来、ずっと異国日本の神霊が統治する中におかれていたことである。統計によれば、1940年までに東北部全土には既に1370の神社があった³¹。

「満州国」政府当局が画策するなか、長春郊外にある淨月潭において2万3000

ヘクタールほどの広い土地を区分けして、そこに広大な“建国の神”を祭る社を建造し、「満州国」の人々の信仰を徹底的に変えようと企んだ。

日本侵略者や漢奸は先頭に立って毎日こうした社に向かって拝んだ。また、各地区・各職場・各部門、そして軍隊にさえも天照大神の神牌を迎えて時間どおりに礼拝し、毎回腰を90度に折り曲げての最敬礼を行い、若者の結婚までも日本の神前結婚の方式を採用し、天や父母を拜むのではなく“建国の神を祭る社”を拜むようにとの中国文の命令を出した。

「満州国」の保安法には、社に“不敬な行為”を働いた者は逮捕して入獄させ、1年から7年までの懲役に処するとの規定まである。また、各種の儀式を行う時は必ず遠くから社に向かって拝み、『国本奠定詔書』と『国民訓』を暗誦し、“国歌”を歌うよう要求した。村上重良がその著『日本近現代の宗教』のなかで、「海外に建立された国家神道の神社はほとんど赤裸々なる宗教侵略を表すものである」と書いているとおりである。

侵略戦争が継続されていくにつれて、国家神道の特殊な地位はいっそう強化され、天照大神は多くの神々の上に君臨する神のなかの神となった。1942年、「満州国」は『基本国策大綱』を採択し、「国民は建国の元神である天照大神に帰依してこれを信仰する」と規定した。

東北に元からあった宗教の宗派や教化団体はこの原則に従わねばならず、それぞれの宗教活動を行う前には、必ず先に天照大神に礼拝して崇拜の念を表してからでないと自らの活動を行うことはできなかった。また、『国本奠定詔書』と“新国歌”が公布されてからは、僧侶や信徒たちは念仏を唱えるのと同じように暗誦することを強要された。

こうした情勢の下、大勢の信徒や宗教関係者が去っていき、閉鎖された寺院もあり、東北部の宗教事業は急速に凋落した。

惟神の道を推し進め、日本の侵略者は超人的な神霊偶像を用いて東北人民の精神世界を統治しようとした意図は陰險なものである。侵略者はほかに企むところがあって“満州国は神の国”であり、“満州国の帝位は神の帝位”であり、“満州国の民は神の民”であると揚言し、溥儀が天照大神の子孫であり、「満州国」と日本は惟神の道に根源を同じくする“親邦”であることを暗に示した。また、「親邦というのは母国を意味する言葉であり、日満両国の関係は親子関係³²のようなものである。極めて親しい愛と道義が両国を一つに結合した」という

のは、傀儡皇帝の祖先を変えたばかりではなく、同時に「満州国」を日本の延長線とみなし、中国東北部を分裂させるための“理論的根拠”を与えるものであり、こうして宗教侵略という方法で東北人民の民族観念や反抗意識を知らず知らずのうちに感化してぶち壊し、中国人民を日本の天皇の“皇民”とし、思想的にも中国東北部を日本の版図にしようとした。

“満州国”政府はその他の教化団体や“慈善機構”に対してもまた、宗教団体に対するのと同様に、様々な方法によって利用し制限を加えた。こうした団体には主に紅卍字会、道德会、同善社、聖道德善会などがあり、いずれもみな宗教的な色彩を有していた。

「満州国」政府当局はしばしばスパイや密偵をこれらの団体の活動に参加するよう派遣し、こうした機会に監視・コントロールしていた。また、あらゆるこれらの団体は、みな日本の意図により協和会によって統一的に指導されていた。そして、これらの団体はみな伝統的な礼儀や道德及び封建的な倫理道德が色濃い内容を有しており、日本侵略者から好意的にみられていた。

統計によれば、1942年までに「満州国」統治者が全東北部において表彰した孝行息子は660名、節婦2510名、烈婦28名、貞女2名であった。これらの“孝行息子や節婦”“仁義礼讓”を“東方道德”とみなし、全社会に大々的に宣揚し、封建的の礼儀や道德にかこつけて“王道主義”を宣伝し、伝統的な礼儀や道德を奴隷化意識に変え、宗教侵略の不足を補ったのである。

三、日本が宗教を利用して侵略を行った特徴の分析

近代以降、西方の宣教師や日本の宗教的な力が続々とやってきて、中国人の思想領域は不断に外来宗教の勢力に攻撃されてきた。しかし、日本は軍事的独占という優勢から、宗教を利用して中国を侵略することにおいていっそう典型性を示した。

東北部が占領されていた14年間において、日本侵略者は偽の宗教を移植し、西方宗教を駆逐して東洋の宗教を輸入し、いろいろ図りめぐらせて各種の教化工作を行った。これらは文化侵略の範疇を遙かに超え、侵略戦争に協力しそれを補うものであった。中国に対する文治武攻の重要な道具として日本が利用した宗教には、以下に挙げるいくつかの特徴があるとまとめられる。

1. 広汎性

東北部の被占領期において、日本は軍事的独占と傀儡政権をコントロールしていたという特殊な条件を有しており、日本が利用した宗教は仏教ひとつのみならず、東北に現存していた一切の東西両方の宗教をすべて自分のために利用し、これ以外にも本国の“神道”を移植して“神のなかの神”とし、“天照大神”を中心とした、看板を変えさせた東西両方の宗教によって作り上げた宗教的侵略のネットワークを編みだした。

2. 欺瞞性

日本当局は国際的にも、中国の被占領区に対しても、日本国内に対しても大々的に世論を起こしたが、ヨーロッパと異なるのは日本の宗教的な欺瞞は完全に政府の行為であった点である。

3. 統制性

周知のとおり、宗教の存在と発展は民衆によるべきものであり、下層社会の広汎な信徒を得てこそ、初めてその宗教は大いに発展するものである。そしてヨーロッパの宗教はまさにそのようにして中国に入ってきた。しかし、日本の東北における宗教政策は、関東軍と傀儡政府の後ろ盾を得、宗教統制を旨とし、宗教を監督・抑圧・制約することを手段とし、宗教の生存空間を国策が許す狭い範囲内に限定するものであった。根本的に宗教や信仰の自由はなかったといえるのである。

4. 軍事的色彩の濃厚さ

宗教を軍事方面において利用することにおいて、日本帝国主義のやり方は顕著であった。東北部の占領期における宗教政策は日本の“満蒙計画”や“大東亜戦争”の軍事政策と表裏一体のものであった。終始、宗教活動は軍事活動と遠くから呼応しあっており、しかも日本の侵略が激化していくに従い、中国に対する宗教活動もまた活発化していった。

東北部が占領されていた14年間、日本植民者は宗教の思想統治作用を十分に発揮させ、それを戦時の侵略体制に組み入れ、侵略戦争の侵略性を覆い隠し、侵略戦争を補充し協力していくものとした。こうした痛ましい歴史は長く人々の記憶に残されていくものである。

註

- 1 いくつかの説がある。満州帝国民生部編の『満州帝国文教年鑑』（康徳五年版）には「仏教が満州に伝わったのは1500年ほど前である」と書かれているが、史書には正確な記載はない。
- 2 『満州国史』分論、満州国史編纂刊行会編、733頁。
- 3 黒龍会『西南紀伝』二巻の一、付録64頁。
- 4 木楊明志「東本願寺中国布教史の基礎的研究」5頁『真宗総合研究所紀要』第5号。
- 5 木楊明志「明治期対外戦争に対する仏教の役割」論集『日本仏教史』第8巻、明治時代、250頁。
- 6 『満州における開教と布教使の教育活動』同朋大学紀要、第5号、95頁。
- 7 楊曾文主編『日本近現代仏教史』浙江人民出版社 1996年、437頁。
- 8 『満州国史』分論、満州国史編纂刊行会編、733頁。
- 9 王承礼主編『苦難と闘争の14年』中国大百科全書出版社、194頁。
- 10 『長春文史資料』1984年第5輯、2頁。1990年第3輯、171-173頁。
- 11 偽満州民生部社会司編集印刷『宗教調査資料』第2輯1937年（『長春文史資料』1988年第4輯、95頁。
- 12 『偽満現状』中央設計局東北調査委員会編集印刷、中華民国三十四年。
- 13 仁信、澍培『偽満州国仏教総会会長如光』（『長春文史資料』1984年第5期、9-10頁より転載）
- 14 仁信、澍培『関東軍の仏教を利用した長白山で展開した“宣撫”活動』（『長春文史資料』1984年第5期、17-19頁より転載）
- 15 仁信、普陰、普貴『偽満仏教総会による監獄の“犯人”に対する“教誨”活動』（『長春文史資料』1984年第5期、20-21頁より転載）
- 16 『盛京時報』1944年5月14日。
- 17 『盛京時報』1943年9月16日。
- 18 『日本帝国主義の対外侵略資料選編（1931-1945）』復旦大学歴史系日本組編、上海人民出版社 1975年。
- 19 『九・一八事変档案史料精編』遼寧省档案館編、九・一八事変叢書、遼寧人民出版社 1991年版。
- 20 孫鵬翁「日本帝国主義が“満州国”においてどのようにキリスト教をその侵略のために利用したか」『遼寧文史史料』第7輯、1983年、107-108頁。
- 21 同上。
- 22 『盛京時報』1941年9月7日。
- 23 前掲注20論文、1983年、114-115頁。
- 24 顧長声『宣教師と近代中国』上海人民出版社 1981年、408頁。
- 25 顧明義主編『日本侵略旅順・大連十四年史』遼寧人民出版社、525頁。

- 26 ルース＝ベネディクト『菊と刀』商務院書館、1996年版、61頁。
- 27 村上重良『国家神道』商務院書館、1990年版、71頁。
- 28 溥儀『我が半生』1964年3月版、北京、360-361頁。
- 29 『盛京時報』1940年7月16日。
- 30 『大満州帝国年鑑』満州帝国通信社編、康德十一年（1944年）創刊号。
- 31 『神道と国家』金禾出版社、126頁。
- 32 偽満『旬報』1942年6月1日、84頁。